

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 9 日現在

機関番号：11101

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K02520

研究課題名（和文）社会的困難を生きる韓国の若者のキャリアパス構築に関する実証的研究

研究課題名（英文）An empirical study on career path development among young people facing social difficulties in South Korea

研究代表者

宋 美蘭 (Song, Miran)

弘前大学・教育推進機構・准教授

研究者番号：70528314

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、社会的困難を生きる子どもや若者、すなわち、制度の学校教育路線とは異なる経路を歩んできた韓国のオルタナティブスクール（代案学校、AS）に焦点を当て、卒業後の彼・彼女らのキャリアパス構築に関する実態を明らかにすることである。研究の結果、第一に、ASの卒業生が抱えている課題では、卒業後の移行問題が深刻であること。第二に、ASを卒業した後、いざ社会と向き合った時に、「主流社会」が求める「学歴」という壁に直面し、主流社会に対抗してきたにも関わらず、「主流社会」の価値の前に「揺らぎ」や「不安」を感じ、結局は主流の価値に妥協したり、同化されてしまう困難さを抱えていたことも同時に明らかにされた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的および社会的意義は、次の3点に集約される。第一に、一般的な教育経路とは異なる経験を持つ卒業生に焦点を当て、彼らが卒業後に直面する移行の課題や社会への適応の難しさを明らかにした点である。そして、第二に、AS卒業生が直面する困難さや、彼らが主流社会との関係でどのように向き合うかについての理解を深める上で重要な洞察を提供した点である。これにより、将来的な支援や教育政策の開発に向けた方向性が示される。そして、3点目に、国際的な共同研究への発展と、調査に基づく理論と実践の融合を通じて研究の学術の共有と拡散を実現できたことに意義がある。

研究成果の概要（英文）： The purpose of this study is to empirically clarify the realities of career path construction for children and young people facing social difficulties, specifically focusing on alternative schools (AS) in South Korea, which have taken different routes from the institutional school education system.

Firstly, it became clear that graduates of AS face serious post-graduation transition problems. It was revealed that they are significantly disturbed by the linear and stable transition to careers and jobs during the post-graduation transition phase, and in many cases, the transition to society is prolonged.

Secondly, after graduating from AS, when they faced society, they encountered the barrier of an "education-oriented society" demanded by mainstream society. Despite having opposed mainstream society, they felt "unsettled" and "anxious" in the face of mainstream values and ultimately faced difficulties in compromising with or assimilating into those values.

研究分野：比較教育学

キーワード：オルタナティブスクール 学校から社会への移行 社会的困難を生きる若者 代案学校 キャリア支援 代案教育機関に関する法律 国際比較 韓国

## 1. 研究開始当初の背景

若者の失業、不安定な就労、ニート(122万人、韓国日報2017)非経済活動人口などの急激な増加に伴い、社会的困難を抱える子どもや若者の問題への関心がますます高まっている。特に深刻な課題として提起されているのは、義務教育の段階で制度上の学校における教育を拒否する子どもたち、いわゆる「不登校」の問題が深刻である。

韓国では「不登校」という言葉を使わず「学業中断」の子ども、あるいは「学校外青少年」という用語を一般的に用いられている。ここでいう、「学業中断」、「学校外青少年」というのは「連続7日以上未認定欠席をしたり、年間累積欠席が30日以上欠席した者」として定義している(教育部2022)。ここでは便宜上「不登校」という用語を用いることにする。

かつての貧困や経済的な理由により学校教育を十分に受けることができなかった子どもたちの問題と同様に、貧困や経済的な理由のみではないが、現在困難を抱えている既存の学校に行けない子ども・若者が多く存在する中で、学校周縁・外側に位置しているASは重要な教育の場となっている。このように不登校や学業中断問題などの、既存の教育制度で包摂しきれない、社会的困難を抱えている子ども・若者にとっての支援や施策は大事であると提唱し、そのための代替的な学びの場や条件整備は重要であるという主張がなされているものの、その具体的な存立条件や支援実践、教育内容にまで踏み込んだ研究の蓄積が少ないである。

なお、表1は、韓国の「不登校」の子ども5年間の推移・実態である。こうした状況に置かれている子ども・若者の中には、十分な教育を受けることなく早期に学校を離れ、安定した職業に就かず不安定な成人期に移行するという問題が指摘されている。

表1 韓国の「不登校」児童・生徒の実態及び推移 (単位:人)

	2017	2018	2019	2020	2021
小・中・高 児童・生徒数	5,725,260	5,584,249	5,452,805	5,346,874	5,323,975
学業中断者	50,057 (0.9%)	52,539 (0.9%)	52,261 (1.0%)	32,027 (0.6%)	42,755 (0.8%)

出所:韓国教育開発院・教育部、「2022年度教育基本統計調査」

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、社会的困難を生きる子どもや若者、すなわち、制度の学校教育路線とは異なる経路を歩んできた韓国のASに焦点を当て、卒業後の彼・彼女らのキャリアパス構築に関する実態を実証的に明らかにすることである。

ASは不登校の子どもや若者の学びを保障する場として、その機能への期待が非常に高まっている。ASなしでは全ての子どもの教育保障が困難とされているが、その位置づけは曖昧である。さらに、卒業後の彼らや彼女らに対する社会的な保障は実践レベルでも不十分であり、国や行政レベルでは支援がほとんど行われていない現状である。

## 3. 研究の方法

本研究は、社会的困難を抱えているASで学んだ経験を持つ若者のキャリアパス構築に関する実態を明らかにし、その支援のあり方を実証的に明らかにすることを目的とする。

これらの目的を達成するために、研究は以下のように進める。

1. ASで学んだ経験がキャリアパス構築にどのような影響を与えるのか。
2. 社会的困難を抱える若者が直面する具体的な困難さとは何か。
3. AS卒業生が進路や労働市場への移行を支援するために、ASと行政がどのように連携しているか。

まず、研究の1年目には、AS研究、社会的包摂問題、若者に関する文献レビューを行い、関連資料を収集・分析する。その後、AS中間支援組織と協力して、インタビューを実施し、ASの現状を把握する。また、AS調査を通じて、若者が直面する困難の具体例を収集する。

研究の2年目には、AS卒業生の進路実態を調査し、ASの類型別に共通点と差異を分析する。これにより得られたデータを基に、アンケート調査を実施し、卒業生がキャリアパスを構築する際に直面する困難を明らかにする。

そして、3年目以降には、ASで学んだ若者の支援の実態と課題を明らかにすることに焦点を当てる。具体的には、AS卒業生が進路や労働市場への移行を支援するために、ASと行政がどのように連携しているかを調査する。この調査では、関係者に対するインタビューを実施し、次の

点を明らかにする。具体的には AS と行政の連携の具体的な方法、連携における成功事例と課題、AS 卒業生に対する支援の効果について。現在、AS の提供主体が急速に増加している中で、AS で学んだ若者の最善の利益を保障するためには、これらの主体間の連携が重要である。この連携の実態を明らかにすることは、今後の支援のあり方を考える上で重要な視点となる。

#### 4. 研究成果

##### (1) AS 卒業生が学んだ教育実践（内容と方法）の特色

AS 卒業生が直面する困難を明らかにするために、まずは、AS 教育実践の特徴について注目した。そのために、卒業生（15 名）、学校の管理職（校長）（3 名）、保護者（2 名）にインタビュー調査を実施した。AS の教育実践の独自性や特徴は次のような点が明らかになった。

韓国の AS の実践は、現代社会が推進する価値観（新自由主義、市場論理に基づく競争主義）に批判的な立場を取り、平和教育運動（マハトマ・ガンディーの「非暴力の抵抗思想」）の重要な価値や普遍的な価値に基づき、既存の学校や教育に代わる現実的で革新的な「変革教育志向性」を持っている。これにより、全人格的人間、共同体的人間、生態的人間への育成を中心に、学習内容やアプローチが展開されている。具体的な課題やテーマを通して、日常生活に関連し、生活、技能、生き方、社会、そして自然との関わりに焦点を当て、生徒が自らの体験を通じて個々の知識を獲得することを重視していることがわかった。これは、「分割された知識」や「断片的な知識」とは異なり、いわば「総合的な知」の形成を重視している教育実践の特徴です（宋美蘭他、2021 年）。

AS の教育実践に内在するこれらの教育原理は、子どもや若者が中心となって学校を築く取り組みであり、生態（都市農業を含む）平和、ともに生きることを中心の課題として掲げている。その中で、「生態的」で「共生的」な生き方の学びや、学んだことを実際に社会に発信する実践（たとえば、「社会的企業」など）に挑戦し、新たな社会転換（教育、文化、福祉、労働）を目指している。これにより、子どもの学びの空間を、マウルを一つの教育の場・空間として捉え、子どもの成長と発達に「学校とマウル一体型」に着眼した取り組みが展開されていることが明らかになった。

以上のことから、得られた知見は以下のようにまとめることができる。

第 1 に、教育目標の再検討である。AS の教育実践は、現代社会の価値観に対する批判的な立場を取り、平和教育や共同体の価値を重視している。公教育の教育目標や価値観を再検討し、より包括的かつ社会的責任を持った教育目標の設定が求められる。

第 2 に、総合的な教育のアプローチである。AS の教育実践では、生徒が日常生活や社会との関わりを通じて総合的な知識を獲得することを重視している。公教育でも、単なる学科ごとの知識だけでなく、生徒が多面的なスキルや視点を身につけるための総合的な教育アプローチが採用されるべきである。

第 3 に、生徒中心の学習環境の構築である。AS の教育実践は、生徒や若者が中心となって学校を築き、生態や共同体の課題に取り組むアプローチを採用している。公教育でも、生徒の声や関心を尊重し、彼らが学びや社会参加を通じて自己実現するための学習環境の構築が重要である点である。

第 4 に、教育と社会・地域の結びつきの強化を図ることである。AS の教育実践では、学んだことを実際の社会に発信し、新たな社会転換を目指す実践に挑戦している。公教育でも、教育と社会の密接な結びつきを強化し、学校が社会変革のエージェントとして機能するための取り組みが必要です。

これらの示唆点を考慮することで、公教育がより包括的で社会的に責任を果たす教育システムを構築する上での方向性が示されていると言える。

##### (2) AS 卒業生の学校から社会への移行の困難さ

15 名の卒業生のうち、実際に幼・小・中・高校、全ての教育過程を一般の制度上の「学校」とは異なる経路を歩んできた AS 卒業生のハン・ピョルさんを対象に半構造化インタビュー調査を、対面・非対面を合わせて数回調査することができた。インタビューから明らかになったのは、

第 1 に、多くの AS が抱えている課題（とりわけ制度外 AS）では、AS 卒業後の移行問題が深刻であることが浮き彫りになった。彼・彼女らは卒業後の移行段階の直線的かつ安定的な進路および仕事への移行に大きく動揺し、社会への移行が長期化するとともに、非正規の仕事を繰り返したり、無業化する若者の少なくないことが明らかになった。そして、第 2 に、AS を卒業した後、いざ社会と向き合った時に、主流社会が求められる「学校歴」という、いわゆる一般社会が価値としている問題に直面していた。「非主流教育」を受けてきて、自分たちはそうした主流社会に対して対抗してきたにも関わらず、いざその現実を目の当たりにした時に、主流の価値のまゝに「揺らぎ」、「不安」を感じ、結局は主流勝ちに妥協したり、同化されてしまい、「主流社会」に負けてしまう困難さを抱えていたことも同時に明らかにされた。

以上の点から行けることは次の 3 点に集約することができる。

第1に、一般的な教育経路とは異なる経験を持つ卒業生に焦点を当て、彼らが卒業後に直面する移行の課題や社会への適応の難しさを浮き彫りすることができた。この点は、非主流な教育経験を持つ人々が直面する現実的な問題に関する理解を深める上で重要な示唆が内包されている。

第2に、主流社会の期待や価値観に対する非主流教育経験者の適応プロセスを明らかにした点である。彼らが社会との接点で直面する「学校歴」という要素に関する課題は、彼らの個々の経験だけでなく、社会全体との関わり合いについても示唆を与えられている。

最後に、本研究の成果は、非主流な教育経験者が直面する困難さや、彼らが主流社会との関係でどのように向き合うかについての理解を深める上で重要な洞察を提供することができた。これにより、将来的な教育支援や教育政策の開発に向けた方向性が示される。

### (3) 困難を抱えている子ども・若者の問題を国際比較調査へと発展

2022年度は、科研費および民間助成金などの競争的外部資金を獲得した研究課題を遂行する。その研究成果を日本国内のみならず、韓国や欧米諸国においても研究の国際交流の深化を図ることができた。

具体的には、研究代表者として採択された、科研(基盤C)「社会的困難を生きる韓国の若者のキャリアパス構築に関する実証的研究(2019.4~2024.3)」、ヒロセ国際財団「多様な学びを保障する『もうひとつの学校』に関する国際比較研究—日・韓・米・フィリピン4カ国におけるオルタナティブ教育実践に着目して—(2019.1~2023.3)」の研究課題を統合して遂行した。

特に海外の研究者と日本国内の研究者共同による国際共同研究の実現を目指すことを目標とし、これまでの研究をさらに発展・精緻化を図ることができた。その成果を日本語、韓国語、英語の3言語により国内・国際学会において随時発表することができた。

国際研究調査ではアメリカの3つの州の大学及び、学校訪問(教師、授業参観)調査を行い、アメリカの研究者とは社会的排除問題、特に、アメリカの移民の子どもの包摂問題、韓国・日本の不登校の問題について相互交流も深めた。韓国の調査では中等教育及び高等教育における今日の動向について、「進路と職業」との関連で調査を行った。

以上の研究活動を通して得られた研究成果を日本語、韓国語、英語の3言語により国内・国際学会において成果を発表した。また、学術図書及び論文発表、日韓両国の関連研究者向けに研究会にて発表を行い、また、関連研究者とも研究交流を行った。

### (4) 本研究の今後の課題

今後の研究課題としては、当時、研究計画3年目以降に計画をしていた、「ASで学んだ若者の支援の実態と課題を明らかにすることに焦点を当て、AS卒業生が進路や労働市場への移行を支援するために、ASと行政がどのように連携しているかを調査」を実施し、「ASと行政の連携の具体的な方法、連携における成功事例と課題、AS卒業生に対する支援の効果について」明らかにする計画であった。しかし、新型コロナウイルスの脅威と拡大、そしてその後の収束の見通しの不透明な状況下で、国内外での研究活動が困難であったために十分に遂行することができなかった。

近年、ASの提供主体が急速に増加している中で、ASで学んだ若者の最善の利益を保障するためには、これらの主体間の連携が重要であると指摘されている。この連携の実態を明らかにすることは、今後の支援のあり方を考える上で重要な視点となる。この点については、今後の継続的な研究調査を通じて研究の更なる発展につなげたい。

#### <参考文献>

宋美蘭編著(2021)『韓国のオルタナティブスクール—子どもの生き方を支える「多様な学びの保障」へ』を、明石書店。

武井哲郎・矢野良晃・橋本あかね編著(2022)『不登校の子どもとフリースクール—持続可能な居場所づくりのために—』を晃洋書房。

日本社会教育学会編(2023)『SDGs社会教育・生涯学習』東洋館出版社。

韓国日本教育学会編(2024)『日本の共生教育』学而社出版(韓国)にて刊行予定(印刷中)にて、第11章。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 宋美蘭	4. 巻 1
2. 論文標題 韓国の「代案教育機関に関する法律」の性格と制定に至るまでの議論構図分析	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 基礎教育保障学会要旨録	6. 最初と最後の頁 36-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宋美蘭	4. 巻 1
2. 論文標題 オルタナティブスクール教育実践からみる主体形成に関する一考察－韓国の堤川ガンジー学校の事例から－	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 日本教育学会大会研究発表要項	6. 最初と最後の頁 81-81
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宋美蘭	4. 巻 60
2. 論文標題 地域と世界を繋げるグローバル市民教育	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 全南教育イシュー&政策（韓国）	6. 最初と最後の頁 24-31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宋美蘭	4. 巻 No.221
2. 論文標題 韓国の不登校政策からみる新しい学び・教育・学校づくり	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 季刊教育法	6. 最初と最後の頁 1-2
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宋美蘭	4. 巻 60
2. 論文標題 地域と世界を繋げるグローバル市民教育	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 全南教育イシュー&政策 (韓国教育雑誌)	6. 最初と最後の頁 24-31
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宋美蘭	4. 巻 65
2. 論文標題 【文献紹介】『韓国のオルタナティブスクールー子どもの生き方を支える「多様な学びの保障」へ』	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本比較教育学研究	6. 最初と最後の頁 137-137
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宋美蘭	4. 巻 1
2. 論文標題 子どもの自由と大人の「協同」による教育を目指す「伴奏支援型」フリースクールーNPO法人北海道自由が丘学園の事例からー	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 The Society of Korea and Japan Education (韓国日本教育学会)	6. 最初と最後の頁 40-65
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宋美蘭	4. 巻 78
2. 論文標題 韓国におけるオルタナティブスクールの実態と課題 オルタナティブスクール卒業生の社会への移行の困難さに注目して	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本教育学会大会研究発表要項	6. 最初と最後の頁 p.144-145
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11555/taikaip.78.0_144	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宋美蘭・若原幸範・ハン・ビョル・チョン・ミンスン	4. 巻 1号
2. 論文標題 新しいグローバル市民生の基盤としてのオルタナティブスクール	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本社会教育学会・韓国平生教育学会研究論文論	6. 最初と最後の頁 p.44-55
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計10件 (うち招待講演 4件 / うち国際学会 3件)

1. 発表者名 宋美蘭
2. 発表標題 オルタナティブスクール運動の文脈から見た「協働」と「共生」の学校・地域づくりの可能性
3. 学会等名 日本社会教育学会第47回東北・北海道研究集会 (招待講演)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 宋美蘭
2. 発表標題 韓国の「代案教育機関に関する法律」の性格と制定に至るまでの論議構図分析
3. 学会等名 基礎教育保障学会第8回研究大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 宋美蘭
2. 発表標題 オルタナティブスクール教育実践からみる主体形成に関する一考察－韓国の堤川ガンジー学校の事例から－
3. 学会等名 日本社会教育学会第70回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 宋美蘭・若原幸範
2. 発表標題 学校を核とする協働と共生の地域コミュニティの創造：北海道における教育運動の事例に着目してー
3. 学会等名 The Society of Korea and Japan Education(韓国日本教育学会)(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 宋美蘭
2. 発表標題 韓国における代案学校の類型と代案教育支援法に関する動向
3. 学会等名 日本比較教育学会(第58回大会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 宋美蘭
2. 発表標題 子どもの自由と大人の「協同」による教育を目指す「伴奏支援型」フリースクールーNPO法人北海道自由が丘学園の事例からー
3. 学会等名 The Society of Korea and Japan Education(韓国日本教育学会論考集)(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 宋美蘭・若原幸範
2. 発表標題 韓国・代案学校を起点とする地域教育コミュニティと持続可能な将来社会
3. 学会等名 日本社会教育学会・プロジェクト研究「SDGsと社会教育・生涯学習」
4. 発表年 2021年



1. 発表者名 宋美蘭
2. 発表標題 韓国におけるオルタナティブスクールの実態と課題 オルタナティブスクール卒業生の社会への移行の困難さに注目して
3. 学会等名 日本教育学会（第78回）@学習院大学
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 宋美蘭
2. 発表標題 社会的困難を生きる韓国のオルタナティブスクール卒業生の実態 - 『非主流社会』を生きるAさんのインタビューを手掛かりに -
3. 学会等名 オルタナティブ教育研究会@大阪府立大学I-site
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 宋美蘭・若原幸範・ハン・ビョル・チョン・ミンスン
2. 発表標題 新しいグローバル市民生の基盤としてのオルタナティブスクール
3. 学会等名 日本社会教育学会・韓国平生教育学会研究大会（第11回）@韓国中央大学（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 宋 美蘭	4. 発行年 2021年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 216
3. 書名 韓国のオルタナティブスクール	

1. 著者名 宋美蘭	4. 発行年 2023年
2. 出版社 東洋館出版社	5. 総ページ数 265
3. 書名 日本社会教育学会編『SDGsと社会教育・生涯学習 日本の社会教育 第67集』にて第14章執筆担当	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<a href="https://www.skku.edu/skku/index.do">https://www.skku.edu/skku/index.do</a> <a href="https://edu.snu.ac.kr/">https://edu.snu.ac.kr/</a> <a href="https://www.usf.edu/education/">https://www.usf.edu/education/</a> <a href="https://www.hongik.ac.kr/index.do">https://www.hongik.ac.kr/index.do</a> The Society of Korea and Japan Education <a href="http://www.skje.co.kr/">http://www.skje.co.kr/</a>
---

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------